

ど派手なステージだった。
激しく唄い踊る

笠置シヅ子のスイング感、
誰をも寄せ付けない天性のものだった。

文・山川智

新しい歌は、新しい才能が唄って
初めて人々の心に届く。

上手いだけ、声がいいだけでは

歴史の中の普通とはならない。

笠置シヅ子はそんな普通の歌手だった。

運動能力に秀で、

ステージを所狭しと動き回った。

その圧倒的なパフォーマンスに

観客は載せられていった。

今のようなテレビ時代であれば、

彼女は流行らなかつたかもしれない。

お世辞にも美人とは言えない顔だった。

おたふく顔……。

だが、ステージでは美しかった。

誰よりも輝く歌手だった。

そのシヅ子を嫌いだのが

天才・美空ひばりだった。

シヅ子のモノマネが始まり、

スーパースターの座を代替わりした。

70歳、笠置シヅ子は卵巣癌で世を去った。

だが、彼女の歌は日本のポップス界に

大きな影響を与え続けている。

それを知るか知らぬか、最期の言葉は

「日劇時代は楽しかったね」だった。



昭和歌謡 誕生物語 [第22回]

— 東京ブギウギ —

笠置シヅ子

ジョン・リー・フッカー、アストロイヤーズ、ゲイリー・グリッター……、彼らは皆、ブギの名曲を持つ米国のミュージシャンである。ブギは20世紀初頭、ピアノの演奏スタイルとして形作られ、スウィング・ジャズやカントリーなどで聞かれるようになったリズムだ。日本では昭和初期に服部良一が紹介。戦後に服部が作曲の「東京ブギウギ」「買物ブギ」などを歌い、「ブギの女王」として一世を風靡したのが笠置シヅ子であった。

笠置シヅ子は小学校卒業後、松竹楽劇部生徒養成所に合格。三笠静子の芸名で初舞台を踏んだ彼女が服部良一と出会ったのは、昭和13年のこと。「帝国劇場」で旗揚げした「松竹楽劇団」に参加した時で、シヅ子は服部と組んでジャズ歌手として売り出した。「大阪で一番人気のあるステージ歌手と聞いて、どんな素晴らしいプリマドンナかと期待に胸をふくらませていた」という服部。だが、目の前に現れたのは髪を無造作に束ね目をしょぼつかせ、コテコテの大阪弁をしゃべる貧相な女の子だった。

ところが、彼女がステージに立った瞬間、そこは華やかな場所になった。

「三センチもある長いまつ毛の目はパッチリ輝き、ボクが棒を振るオーケストラにびったり乗って「オドゥレ。踊ウレ」の掛け声を入れながら、激しく歌い踊る。その動きの派手さとスイング感、他の少女歌劇出身の女の子たちとは別格の感で、なるほど、これが世間で騒いでいた歌手かと納得した」（服部の自伝「僕の音楽人生」より）。

戦前のこと、シヅ子の派手なステージパフォーマンスはたちまち当局に目を付けられる。彼女は劇場への出演を禁じられ、「笠置シズ子とその楽団」を結成後、慰問活動の際もマイクの周辺1メートル前後の範囲内で歌うことを強要されるなど、問題歌手のイメージが付きまとった。

私生活では8歳年下の吉本頼右（吉本興業創業者・吉本せいのお息子）と恋仲になるが、結婚は許されないまま昭和22年、頼右は24歳の若さで病没。シヅ子はその数日後に女児を出産。乳飲み子を抱えてステージに立つ姿は、生きていくために体を売る「夜の女」たちから圧倒的な支持を集めることになる。

その後、シヅ子は「自分の一番いい時代を自分の手で汚す必要はない」として、昭和32年、歌手廃業を宣言。芸名も笠置シズ子を笠置シヅ子と改め、女優活動に専念するが、それに際し彼女は各テレビ局や映画会社などを自ら訪れ、「私はこれから一人で娘を育てていかなければならない身。なので、これまでのギャラでは無理でしょうから、どうぞギャラを下げて下さい！」と出演料ランクの降格を申し出たというのには有名な話だ。

持ち前のバイタリティーで数々の伝説を作った笠置シズ子。彼女の大ヒット曲である「東京ブギウギ」は、彼女の生き様と共に、いつまでも歌い継がれている。

山川智◎1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に「東方神起の涙」「東方神起」YJを歩く（共にイーストプレス）、「ヒートアップドキュメント」のさすな（リーブル出版）など。また出版プロデューサー作品として「生きる 藤家弘介」（スターツ出版）、「アキハる社員」二軒食ギヤと（共にイーストプレス）など多数。